PRESS RELEASE　2022.9.6

東京都現代美術館

ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ
柔らかな舞台

2022 年 11 月 12 日（土）― 2023 年 2 月 19 日（日）

ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ（1962 年ロッテルダム生まれ、ベルリン在住）は、2017 年ヴェネチア・ビエンナーレのオランダ館代表を務めるなど、オランダの現代美術を代表するアーティストの一人として、20 年以上に渡り映像作品や映像インスタレーションを発表してきました。彼女の映像は、他者との共同作業を通じて人々の関係を形成すると同時に、それによって形作られるものとして試行を重ね、シナリオを設定しない撮影に、キャストやクルーとして参加する人々が現れます。撮影の場という設えられた状況で、あるテーマについて人々が対話する過程で発露する主観性や視座、関係性を捉え、鑑賞者の思考との交差を指向します。

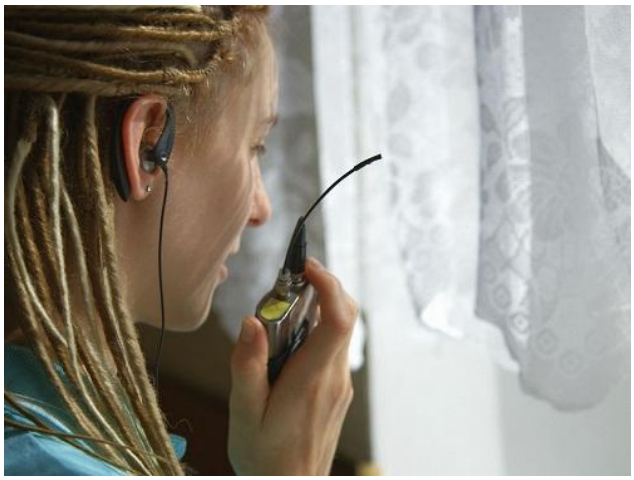
このたび当館で開催する国内初めての個展「柔らかな舞台」では、彼女の代表的な映像作品から新作まで 6 点を展示します。初期作品からは、17 世紀のオランダ領ブラジルで総督を務めたヨハン・マウリッツの知られざる統治をめぐり、マウリッツの手紙などを読み上げながら議論する《マウリッツ・スクリプト》（2006 年）、オランダによる植民地政策にラジオがもたらした影響についての対話と、インドネシア独立運動家スワルディ・スルヤニングラットが書いた手記「私がオランダ人であったなら」を読み上げる声とが交わる《偽りなき響き》（2008 年）の 2 作品を紹介します。《マウリッツ・スクリプト》はマウリッツの旧居でもあるマウリッツハイス美術館で、《偽りなき響き》はオランダ領東インド（現在のインドネシア）に向けたラジオ放送に使われた放送局跡地で、DJ、看護師、政治学者、ラッパー、アーティスト、ジャーナリストなどが参加する公開撮影として行われました。このように、ある場所がもつ歴史的文脈、そして異なるバックグラウンドや専門分野を持つ人々の声は、ファン・オルデンボルフの作品において豊かな多声性をもたらす重要な要素となります。

1.《マウリッツ・スクリプト》2006 年、映像スチル

2.《偽りなき響き》2008 年、映像スチル

お問い合わせ：東京都現代美術館 事業企画課 企画係 広報班　工藤・稲葉・内堀
TEL：03-5245-1134（直通）/ FAX：03-5245-1141
E-MAIL：mot-pr@mot-art.jp　URL：https://www.mot-art-museum.jp
※開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

ファン・オルデンボルフの映像制作では、音楽、映画、詩、建築、絵画といった芸術実践やその歴史も要素として多く取り上げられます。2019 年に制作した《ふたつの石》は、共に 1930 年代初期にソビエト連邦で活動し、戦後オランダで活躍したドイツ人建築家ロッテ・スタム=ベーゼと、ロッテルダムの差別的な住宅政策に異を唱えた南米・ガイアナ出身の活動家ヘルミナ・ハウスヴァウトの軌跡を取り上げます。スタム=ベーゼが計画に携わったハルキウ・トラクター工場（KhTZ）の集合住宅地とロッテルダムで撮影されたこの作品では、それぞれの地で現在活動する建築家や住民らが、二人の理想とそれらの間の不協和音について語り合います。



3. 《ふたつの石》2019 年、映像スチル

4.《ふたつの石》2019 年、映像スチル

同年、ポーランドの映画産業に関わる女性たちと制作した《オブサダ》（obsada＝ポーランド語で「キャスト」の意味）では、20 世紀の前衛芸術においても見落とされ、今日の芸術生産の場でも解消されないジェンダー不平等の問題と、これからの変化に対する希望について、女性たちが共に撮影を進めながら率直な言葉を交わします。ジェンダーの問題はこれまでのファン・オルデンボルフの作品で様々な角度から扱われてきましたが、改装中のアーネム博物館で 2019 年に撮影した《ヒア》（hier＝オランダ語で「ここ」の意味）でも、オランダで音楽活動や文筆活動を行う若い女性たちが紡ぐ、自らの異種混交的なルーツや性についての表現が繊細に交差しています。

5. 《Hier. /ヒア》2021、映像スチル

6. 《obsada/オブサダ》2021、撮影風景

また、本展を機に国内で制作する新作は、主に 1920 年代から 1940 年代にかけて活躍した女性の文筆家たちが、女性の社会的地位や性愛、戦争といった問題に切り込んだテキストを取りあげ、それらが今

日の社会のどのような側面を映し出すかを探ります。支配的な言説やイメージからいかに逸脱しうるのかという問いを、展示空間の構成においても重ねてきたファン・オルデンボルフは、本展を、フレームを定めることのない舞台セットのようなインスタレーションとして構成します。

ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ　プロフィール
1962 年ロッテルダム（オランダ）生まれ、ベルリン在住。人々と協働しシナリオや設定を作り上げる映像制作を、諸形態の作品を生み出すための方法であり言語として探究してきた。近年、ウッチ美術館（ポーランド、2021 年）、ドス・デ・マヨ・アートセンター（マドリッド、2019-2020 年）、第 57 回ヴェネチア・ビエンナーレオランダ館（ヴェネチア、2017 年）などでの個展を開催したほか、ソンズビーク 20->24（アーネム、2021 年）、シカゴ建築ビエンナーレ（シカゴ、2019 年）、世界文化の家（ベルリン、2019 年）、シンガポール・ビエンナーレ（シンガポール、2019 年）、あいちトリエンナーレ（愛知、2016 年）、キーウ・ビエンナーレ（ウクライナ、2015 年）など数々の国際展に参加。

関連イベント

会期中にギャラリートーク、読書会などの関連プログラムの開催を予定しています。参加方法・詳細は当館ウェブサイトで順次公開いたします。

展覧会概要

※開催内容は都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

会期	2022 年 11 月 12 日（土）― 2023 年 2 月 19 日（日）
開館時間	10:00－18:00（展示室入場は閉館の 30 分前まで）
休 館 日	月曜日（1 月 2 日、1 月 9 日は開館）、12 月 28 日－1 月 1 日、1 月 10 日
会場	東京都現代美術館 企画展示室 3 階
観覧料	一般 1,300 円 / 大学生・専門学校生・65 歳以上 900 円 / 中高生 500 円 /小学生以下無料 ※本展チケットで「MOT コレクション」もご覧いただけます。
主催	公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館
助成	オランダ王国大使館、モンドリアン財団
お問い合わせ	050-5541-8600（ハローダイヤル）

「ウェルカムバック券」
本展は映像作品で構成されるため、ご購入頂いたチケットで 1 回限り再入場できる「ウェルカムバック券」をご用意します。ご希望の方は、展示室内のスタッフにお声がけください。

同時期開催

企画展「クリスチャン・ディオール、夢のクチュリエ」(12 月～予定)
コレクション展「MOT コレクション」（11 月 3 日～2023 年 2 月 19 日）

お問い合わせ：東京都現代美術館 事業企画課 企画係 広報班　工藤・稲葉・内堀
TEL：03-5245-1134（直通）/ FAX：03-5245-1141
E-MAIL：mot-pr@mot-art.jp　URL：https://www.mot-art-museum.jp
※開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

東京都現代美術館　広報班 宛　　FAX. 03-5245-1141

画像請求書

広報用図版として 6 点をご用意しております。掲載ご希望の方はお手数ですが本請求書に必要事項をご記入の上、FAX またはメールにてご連絡ください。なお、写真の使用に際し、キャプション、作家名、作品名、制作年、コピーライト等を必ずご表記ください。作品のトリミング、編集、文字載せはお控えください。本展記事をご紹介いただく場合には、恐れ入りますが情報確認のための校正原稿をお送りいただき、掲載後には、掲載誌（紙）、HP リンク、DVD、CD 等を広報班宛てにお送りください。

媒体名：　　発売・放送予定日：

種　別：ＴＶ　ラジオ　新聞　雑誌　フリーペーパー　ネット媒体　その他

御社名：　　ご担当者名：

Ｅメールアドレス：

ご住所：

ＴＥＬ：　　ＦＡＸ：

ご希望の図版番号に印をお付けください。

☐ 1　ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ《マウリッツ・スクリプト》2006 年、映像スチル

☐ 2　ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ《偽りなき響き》2008 年、映像スチル

☐ 3、4　ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ《ふたつの石》2019 年、映像スチル

☐ 5　ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ《Hier. /ヒア》2021 年、映像スチル

☐ 6　ウェンデリン・ファン・オルデンボルフ《obsada/オブサダ》2021 年　撮影風景
Photo by Jakub Danilewicz

お問い合わせ：東京都現代美術館 事業企画課 企画係 広報班　工藤・稲葉・内堀
TEL：03-5245-1134（直通）/ FAX：03-5245-1141
E-MAIL：mot-pr@mot-art.jp　URL：https://www.mot-art-museum.jp
※開催内容は、都合により変更になる場合がございます。予めご了承ください。

MOT MUSEUM OF CONTEMPORARY ART TOKYO 東京都現代美術館